

る。この細胞の鑑別は困難なため、未だ明らかな結論を得ていないが、アカゲザルに見られる1:1という比は成り立ち難いように思われる。もしそうであるとすれば、同属においても種が異なれば精祖細胞の型と分裂の様態が異なることになる。今後の観察を待ってこのことに関する明らかな結論を出したい。

霊長類におけるゴナドトロピンの調節機序の研究

若林克己(群大・内分泌研)・和田 勝・
服部淳彦(東医歯大・教養)・吉田高志
(予研・霊長類センター)

サル視床下部由来のLHRHと、合成哺乳類LHRHとの比較実験を目的として、ニホンザル視床下部7個を入手し、氷冷下で10倍量の1N酢酸を含むエタノールでホモジナイズし、その高速遠沈上清を加温減圧濃縮して更に遠沈上清を採り、その一部を緩衝液で希釈してLHRHに対するRIA系で測定した。このLHRHのRIA系は合成哺乳類LHRH-BSA結合物で家兎を免疫して得た抗体と、合成LHRHを放射性ヨード標識し、高速液体クロマトで精製したものを使用している。この結果、得られたLHRHの総量は0.210 ngであった。これでは、全量を使用しても、生体への投与実験は不可能であるので、更に多くの視床下部からの抽出を考えている。また、LHRHのRIA系についても、抗原決定基に差があることを考え、種特異性のない、共通アミノ酸配列の部分で認識する単クローン抗体を用いて、改めて測定し直すことを考えており、すでにその抗体の作製を完了し、RIA系も確立した。

課題 13

サルにおける2~3の疾病に対する抗体調査

金城俊夫(岐大・農)

次の4種の疾病に対する抗体調査を行った。

1) SV40感染症:昨年度、H野猿公苑のサルよりSV40を分離したことを報告したが、今回は

分離株に対する抗体調査を該公苑のニホンザル8頭、その他の施設の主としてニホンザル221頭および外国より輸入し検疫中のカニクイザル128頭、総計357頭について、免疫粘着赤血球凝集反応で行った。その結果、抗体陽性率は該公苑のサルで100%、その他の施設のサルで75.1%、輸入サルで0%であった。この成績は、SV40がH野猿公苑だけでなく、わが国のサルの間に高率に浸淫していることを示唆している。なお、年齢の明らかなニホンザル56頭についてみると、陽性率は加齢と共に増加し、5才以上では95%に達した。

2) ロタウイルス感染症:本症は人畜の主要な下痢症の1つとして最近注目されている。国内産のサル254頭について、牛由来のリンカン株を抗原として補体結合反応で調べた。陽性率は27.2%であったが、群れの間に差があり、例えばA群では85.7%(12/14)、B群では68.4%(13/19)、C群では0%(0/12)で、汚染群のサル間ではロタウイルスの水平伝播のあることが示唆された。

3) オウム病:市販の抗原による補体結合反応で、国内産のサル271頭について抗体調査を行った。その結果、陽性個体は23頭で、陽性率8.5%であった。しかし本症も群れにより陽性率に差があり、上述のB群では36.8%(7/19)、またD群では35.0%(7/20)と比較的高率であるのに対し、C群(12頭)およびF群(17頭)では陽性個体は全く認められなかった。

4) トキソプラズマ症:市販の抗原を用いたラテックス凝集反応で、214頭の国内産サルについて調査した。抗体陽性個体は12頭で、陽性率は5.6%と比較的低率で、また陽性例の抗体価も低い値であった。なお、陽性個体の飼育場所等による片寄りが特にみられなかった。

霊長類好中球における薬物応答の種特異性

鈴木幸雄(岡大・歯)

歯科領域で汎用されているフェノール性抗感染薬(チモール、ユージノール)がモルモット好中球のスーパーオキシド(O_2^-)産生を惹起する。本研究ではチモールがヒト好中球にも作用するとして、ヒトに類縁な霊長類の好中球への作用と比較検討したので報告する。(方法)好中球はヘパリ